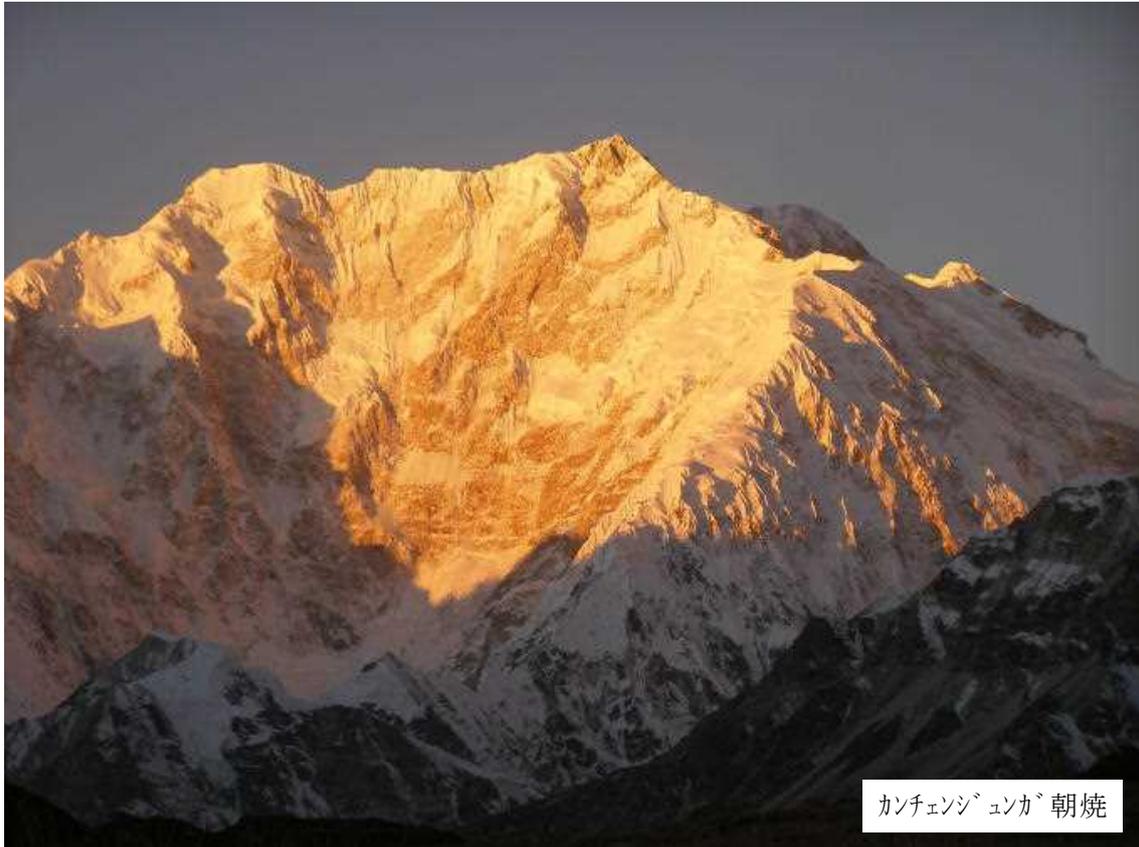


ゼム氷河 インド・シッキムヒマラヤ グリーンレイク

～～ カンチェンジュンガ展望 ～～

アルパインツアー

2016年11月12日 ～ 27日



カンチェンジュンガ朝焼

カンチェンジュンガを見るためにインドのシッキム州からゼム氷河というところに行った。カンチェンジュンガはインドとネパールの国境にある。世界第3位(8585m)の高さを誇る。シッキムというところは、中国・ネパール・ブータンに囲まれて、なぜここがインドであるかが不思議である。こんな位置関係にあるのでかつては国境紛争が絶えなかったようである。今でもインドに入るのにビザが必要である上に、シッキムに入るために更にビザが必要になる。このため写真が13枚要求され、州都ガントクでは書類審査のために1日待たされた。(Mハラさんは15枚要求されたといっていたが、彼の場合は預金量が少ないのであろう。ビンボー人は痛めつけて消耗させろということは、どこの国のセーフでも良くやることだ)銃を持った兵隊さんも多くあまりぞっとしない。カンチェンジュンガ展望としては2007年4月にダー



ジリン経由でゾングリ峠から見ているが、今回はそれよりももっと東側のラチェンから臨むことになる。カンチェンジュンガとグリーンレイクとの距離は 11 km ということである。2007 年に比べるとぐっと近いので迫力が違った。エベレストや K2 は山頂の一部しか見えなかったが、山塊全体を見渡すことができ、あのルートをとれば登れるのではないかなどというとてもない錯覚を起こしたりする。



今回のツアーリーダーは久保さんで 2007 年のゾングリ峠の時と同じである。アルパインツアーでは新コースの開発担当をしているようで、今回もその一環として 4 月にも同じコースを実施しているとのことである。このコースに挑むのはその時の久保さん隊を含めてこの年 4 隊目であるという。しかも 9 月に挑んだ 2 隊は途中の崖崩れによって 1 日目で断念したということである。それではとんでもなく難しいコースなのかということとそんなことは

ない。政情不安な地帯であることが我々登山者には幸いして、インド軍隊が石畳の道をしつかりと作ってくれている。ただし全コースこの石畳でカバーされているのかというとそんなに甘くはない。まあ 6 割くらいといったところか。特に枝沢が氾濫してこの道が崩れてしまっているところが何ヶ所もある。



石畳の道

メンバーはジーサマ 4 人にバーサマ 3 人。ジーサマでは、兵庫の F ナハラさんは男の最年長で 73 歳、絵画・ゴルフ・モーターボート・パラグライダー・剣道と何でもこなす趣味人であるが元は歯科医、登山靴をガムテープで補強して歩いているようなので現在の登山能力は疑問。少しの時間を見つけてはスケッチブックと取り組んでいる。Mハラさんは完全リタイア組であるが記憶力抜群、何でもよく知っている。今回も枯れた茎を見つけてはこれはブルーポピーの白、などと言っている。ブルーポピーはすべて青だと思っていたら、ピンクも赤もあるという。それを枯れた茎から見分けていた達人、カメラも 1 眼望遠のすごいやつを持っていた。Y ムラさんは写真主体で山はそれを撮るために行くにすぎないと公言する。歩くのが遅れたって気にもしないでカメラを構える。64 歳と最年少で仕事も現役である。バーサマでは、T ハシさんが多分最年長。F ハラさんよりも上と見た。山の経験はかなりありそうであるがいかんせん年を取り過ぎた、結構バテル場面が見受けられた。バテルといえば H ガワさん、ポーターがどうぞと言えぱピョンと背中に飛びついてしまう。二人とも 5 kg に満たない荷物を苦にして個人ポーターを付けている。M ヤマさんもバテ組の一人だ、卵アレルギーということで食が進まない。なんといっても山では食わなくっちゃあ。初日だけは一人で歩いていたが、やはり個人ポーターのご厄介になっていた。最近私が参加するパックツアーでは女の方が質量ともに強いのが普通であるが、今回は M ハラさん以外はジーサマもバーサマも並以下であり、特にバーサマはかなり低レベルである。



1. 序章 (成田～デリー～ガントク～ラチェン)

成田～デリー間は 9 時間程度であり、このくらいは短い時間であると思えるようになってきたので、俺も飛行機の持久力だけは国際感覚を身に着けたといえる。デリーは単に泊まっただけで通り過ぎた。ホテルのフロントにはきれいなお姉さんが居て期待の胸は膨らむ。しかしテレビに映る女性などは西洋系の顔をした人がほとんどであるが、街で見かける顔にはこのような人はまず見かけない。なぜかテレビに映る男の方は、いわゆる濃い顔のインド人然とした人が多い。10 年位前までは世界の主要都市では NHK-BS の海外放送が見られることが当たり前であったが、デリーでもそれを見ることはできなかった。日本の国力低下か、それともほかに理由があるのか。ビュッフェの





ガントクの街

食事では“生野菜やカットされた果物は避けた方が良いでしょう”などと久保さんが細やかな注意をしてくれる。4月のスリヤピークでは下痢で悩まされたので、しっかりと受け止める。

翌日国内便で2時間ほどかけてバグドグラ空港経由で、車に乗ること5時間でシッキム州の州都ガントクへ向かった。前述のようにここで入国審査チェックのために1日滞在になる。ガントクはシッキム州の州都であるので月曜日にも拘らず街には人が溢れていた。早くもここでダーズリン茶の土産を買う。いったいこんな奥地にどんな農産物や産業があるからこんなに人口が多いのかと疑問に思う。この次の街で登山基地となるラチェンでも

同じことを感じた。ガントクからラチェンまではさらに車で5時間かかる。だんだん舗装部分が少なくなると反比例してジャリ道が多くなる。久保さんの話によると、ラチェンはインド人のみが入れるリゾートがあるので賑わっているということであるがそれだけではないような感じを受ける。インド特有の理由が集まる要員というのがあるのかも知れない。



ラチェンの街

2. 登山開始

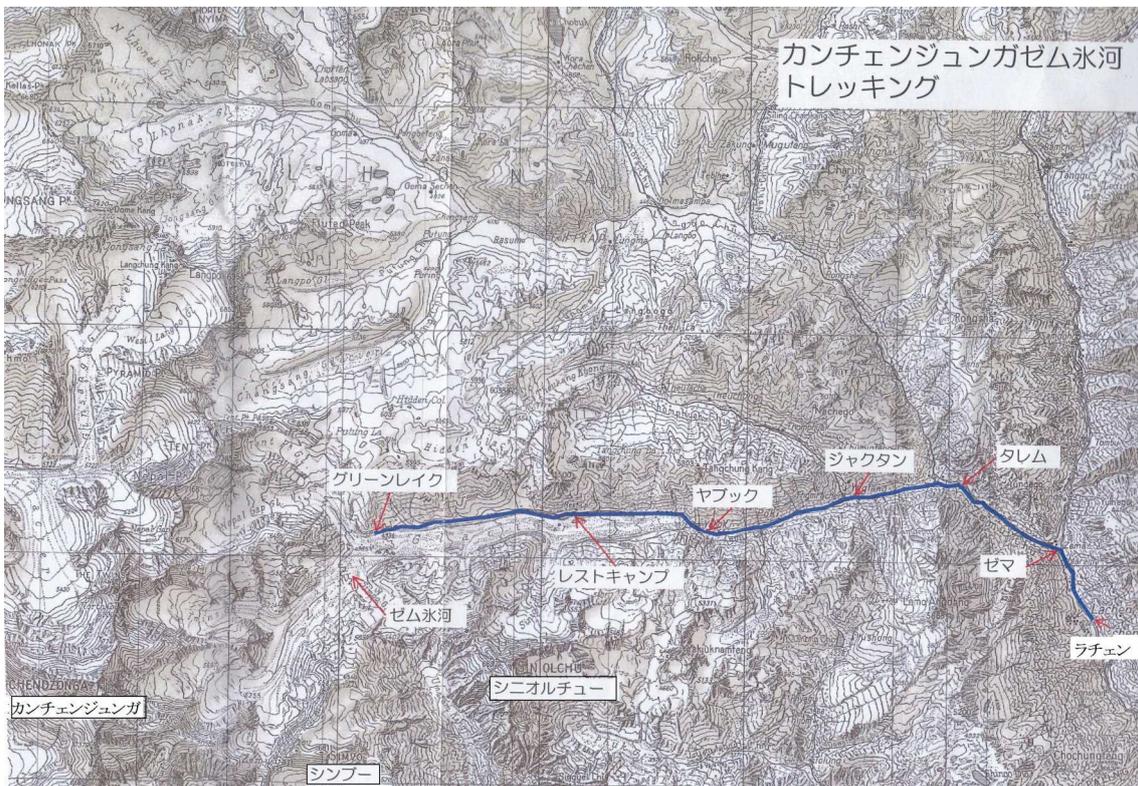
ゼム・チュー（谷）を延々と遡ってグリーンレイクまで行くのが今回のコースである。当初はラチェンから歩き始める予定であったが、1時間半ほどは車道があるので登山口のゼマまでは車で行くことになった。いきなり車道を歩かされるなん



ゼム・チュー(谷)の出発点

てうんざりである。出発点にはソンさんの顔が見える。2007年のゾングリ峠の時にサーダー（ガイドのボス）を務めてくれた人である。あの時にも久保さんからこの地域のガイドのボスであると教えられていた。今回はインド政府も目を光らせるような複雑な地域であるのでソンさんが直にチェックしに来てくれたようである。さらにガイドとしてミノットさんが特別に付いてくれるようになった。ミノットさんはもともと我々のパーティーのサーダーを務めてくれる予定であったのであるが、クライミング中に背中を痛めてしまって参加できなくなってしまった。しかし彼は経験者の少ないこのコースの中で11回の経験を持っており、久保さんが是非にということは無理を聞いてもらったようである。

さて、歩き始めて1時間もたたないうちに早速難関にぶつかってしまった。9月に挑戦し



た 2 隊が撤退を余儀なくされたという沢筋に今は高巻き道が作られていて何とか通れるようになっていいる。ミノットさんが作成したレポートを見たインドの軍隊が 2 週間前に作ってくれたそうである。しかし軍隊にとっては通れる道かも知れないが、我々素人が歩くにはあまりにも急である。木の根をつかんでよじ登れるところはまだ良いのであるが、つかもうと思っても草しかないところもある。何とか切り抜けはしたが、グリーンレイクまでの往復である今回のコースでは、帰りにまた通らねばならない。降りの方がはるかに怖いので最後までこの場所のことは頭の隅に残った。久保さんの話では 1 日目のこの日が一番きついということであったが、4 月の時点ではこの高巻きの部分は全くきれいな道であり 10 分で通り過ぎたとのことであった。ただし久保さんの言うところのそれより先の川の岩や石のゴロゴロしたところは確かに歩き辛くはあったが、山ではこの程度はどこでもあるところであると感じた。

さてこの晩からは久しぶりのテント生活である。私はこのツアーを久保さんから紹介されたときに、テント生活であるので即決した。ヒマラヤの主だったところは、現在ではほとんどロッジ泊まりになっている。

2000 年に初めてゴーキョピークに行ったときは、テント生活についてなんて不合理なことをやっているのかと思ったが、最近の合理的になったヒマラヤトレッキングを見て、山に合理性を求める方がおかしいということにやっと気が付いた。キッチン（食堂）テントやトイレテントは昔と変わらない。しかし近代文明はヒマラヤにも押し寄せている。キッチンテントの照明はもちろんのこと、夜になると各テントに LED が配られる。



テント村



キッチンテント

トイレテント



LED

LED 充電

3. 高所登山



シニオルチューとシンプーをバックに

ゼム・チュウの谷に入って3日目でヤブック(3850m)に着く。高所登山になってきたといった感じを受ける。美しい山といわれるシニオルチュー(6887m)や貝殻のような山容が特徴のシンプー(6811m)が白く輝いている。 昼食もキッチンポーターがちゃんとテーブル椅子付きで面倒見てくれる。

翌日は高所順応日である。高所順応日といっても朝から昼寝をしていて良いわけではない。むしろ昼寝は

体全体への酸素の供給を鈍らせるので良くない。3時間ほどの軽いハイキングをする。一旦高いところへ行って戻ってくると、その高度での高所順応ができるとされている。

トレッキングというのは元々はその土地に住む人たちの生活道を歩くこととされていたので、久保さんに“このコースは全く人の住んでいないところを歩くのであるからトレッ



昼食風景

キングと表現するのはおかしいよ”と言うと、“こちらの案内書でも exploration（探検）と書いてありますね”と言っていたが、最近ではトレッキングも軽登山と解釈されることが多く、トレッキングに関する題名の登山案内書籍もたくさん出回っているのでもうどうでもいいか。

血中酸素濃度の測定も始められた。

レストキャンプ(4500m)まで高度を上げると寒さも一段と厳しくなる。シュラフを2重にしてさらにインナーを使ってやっと温まることができる。高山病対策で水をいっぱい飲むので、夜中に5～6回くらいは小便に起きる。かなり寒いのであるが、それを救ってくれるのが満天の星空である。オリオンが横向きで出てきて時間が進むにつれて少しずつ立ってくるなんて知らなかった。去年白内障の手術に踏み切ったのもこの星空が見たいがためであった。眼科医から



もこもこ



夕食風景



朝焼けのカンチェンジェンガ

はまだ手術するほどではありませんと言われたが、白内障の手術をしたら星空がはっきり見えるようになったという話を聞いてすぐに手術に踏み切った。今まではあまりはっきりとその効果は感じられなかったが今回ははっきりと認識できた。流れ星も見ることができた。実にくっきりと大きな流れ星が私の上から前方へ勢い良く流れていった。



モルゲンロートに輝くシニオルチュー

朝になると、日差しがさす前から Y ムラさんを始めとして、M ハラさんも F ハラさんも女性たちもカメラを構えてテントから出てきた。まずカンチェンジェンガが遠い朝日にピンクに染まる。赤の度合いは今一つの感がある。久保さんの話では 4 月の時点ではもう少しピンクが鮮やかであったようである。

レストキャンプはシニオルチューへのベースキャンプでもあるらしい。ここから見るシニオルチューは世界で一番美しい山と評価されたこともあるらしい。その後その評価は南米ペルーのアルパマーヨ山に移ったみたいである。最も一番美しい山などというのは、どのような機関がどのような基準で決めたなどというものはないので、本当かどうかはわからない。我々日本人にとっては世界で一番美しい山はあくまでも富士山であって、二番目がどれだとは考えられない。

4. グリーンレイク



カンチェンジェンガとゼム氷河

レストキャンプに 2 泊してグリーンレイクに移動する予定であったが、グリーンレイクの水は名称に反してとても水源として利用できるものではないことが判ったので、レストキャンプは一泊として、レストキャンプとグリーンレイクの間位を最終のキャンプ地とした。おかげでグリーンレイクへのピストンが短くなって楽になった。

歩く順番は 2 日目からミノットさんが先頭を引っ張って、2 番目が私、3 番目が M ハラさんでこれが一つのダンゴ。それからはるかに離れて F ハラさん、彼は人にくっ付けられるのが嫌いということで久保さんが距離を取りながらチェックしている。さらにずっと離れて Y ムラさんがカメラ中心でマイペース歩行。M ヤマさんと T ハシさんはほぼ同じペースでさらに後ろ。なんだかわからないのが H ガワさんで、ポーターの背中で寝ているときは速いみたいだが、自分で歩いているときはもう死にそうな顔をしている。

グリーンレイクはその名を付けた人の顔が見たいというような泥色のレイクではなくポンド（池）である。元はレイクであったらしいが岩崩で今の形になってしまったらしい。ただしカンチェンジェンガから水平距離で 11 km ということなので、やはりその迫力は今回のコースの中で一番である。

このツアーはゼム氷河トレッキングと題がつけられていたので、2006 年に行ったパキスタンのバルトロ氷河みたいに氷河の上をもろに歩くのかと思っていたら、せいぜいモレーン（氷河に押しつけられた土手）の上に行くだけで、氷河という点では期待外れであった



グリーンレイク集合



ミノットと



ゼム氷河（上流：雪）



ゼム氷河（下流：石ころ）

ゼム氷河は上流側は雪状であるが、下流側はその上に石ころを敷き詰めたような状態で一見氷河とは思えない。

5. スタッフ（ガイド&ポーター）

われわれ客 7 人+久保さんに対して 42 人のガイドとポーターが、食事や行動および荷運びのアシストをしてくれる。そんなわけであるのでヒマラヤ登山は日本での登山よりもはるかに楽である。おまけに歩くのはビスターリ・ビスターリ（ゆっくり・ゆっくり）であるからこれ以上楽な山登りはない。ちょっとでも危なそうなところがあると手を差し伸べてくれる。

往きの時に高巻きを強いられてここは帰りには大変だなあと思ったところでは、登ってきた政府関係の人達の情報で沢筋が通れることが判った。そんなときでも彼らは先にその地点まで行っていて、ロープを張ったり簡易型の木の足場を立てたりしてくれて、我々の安全を図ってくれた。こうしたケアがなければとても我々だけでこんなところに行くことはできない。ミノットさんの話では、9月の時は

増水でこの道自体が歩ける状態になかったとのことである。

なお彼らは国籍こそインドであるが、人種としてはネパール系であり、しゃべる言葉もネパール語である。ガイドはネパール語と英語はしゃべれるがインド語はしゃべれないようである。



ポーターの荷運び



ガイドのアシスト



危険個所へのケア

